

近代イランの女性団体 ——女子教育推進とナショナリズム

山 崎 和 美

はじめに

イスラーム化された後のイランでは、イスラーム法に従い、男女の空間分離という社会規範が形作られてきた。女性は公の場から隔離されるべきとするイスラーム法に基づく社会規範の中で、女性が学校で教育を受けることだけでなく、教養を身に付けて自己表現することさえも、イスラーム法の厳守を主張する保守的な人々からタブー視され、攻撃を受けたのである¹。

19世紀になると、そうした女性の状況に言及し、女性の権利を擁護しようとする者たちが現れる。ガージャール朝（1796～1925）治下において、特に、欧州の侵略を受けたことによりイラン流の近代を模索する男女知識人たちは、「女性の恵まれない立場を改善することは、国家の独立、強さ、名誉を保証し守る。教育を受けた女性、特に教育を受けた母親が不在であれば、国家は没落する」という議論を展開していく²。これら知識人の女子教育に関する議論を後ろ盾として、立憲革命（1905～11）³の時代、女性活動家の活動が活発になる。反専制と反帝国主義の下に結集した大衆が国王に対して異議申し立てをする「イラン型大衆運動」の代表的な事例ともいえる立憲革命により、イランの歴史上はじめて、国民議会（Majles-e Melli, イラン国会）設立と憲法制定が実現し、女性の活動も許容しうるような風潮が生み出されたのだった。民間の女子校設立者や女子教育必要論を唱える婦人雑誌（女性を対象とする新聞や雑誌などの定期行物）の発行者たちは、近代的な学校制度における女子教育の必要性を訴えた⁴。

教育を受ける権利を求めるといえば「フェミニズム」的な運動を実行していく中で⁵、女性たちは、イスラーム法の厳守を求める保守的な者たちからの攻撃をかわすため、「シーア派イスラーム」に基づく道徳（心）の涵養のために女子教育が必要であるという議論を展開する⁶。また、英露など欧州による侵略に対抗し国家を近代化しようと愛国主義的な運動を志向する人々からの

共感や支持を得るために、「ナショナリズム」的、つまり愛国主義的な活動と結び付けて、女子教育必要論を主張し女子教育推進運動を実践した⁷。女性が教育を受ける権利の要求という、いわゆる「フェミニズム」的な女性たちの「声」からは、「近代的イラン女性」という新しい理想的な女性像を読み取ることができる。これは「欧米由来の近代的な衛生学・家政学の知識を有する家庭の母・妻・主婦としての役割を果たし、愛国心を有し、イスラームに根ざした適正な道徳心 (akhlāq) によって子どもや夫を養育 (tarbiyat) する女性」というイメージであり、この理想的な女性を育成することが求められるため、女子教育が必要だと主張する議論として結実していく⁸。

この女性像が生み出された背景には、女性活動家が直面した理想と現実の隔絶がある⁹。彼女らは女子教育の実現を試みたが、現実には、女性の教育のみならず自己表現すらままならない伝統的な社会規範に阻まれ、保守的な伝統主義者たちの激しい攻撃に晒された。そのため、女子教育の正当性を訴えその推進を図るために、様々な戦略を講じたのである。「近代的イラン女性」はそのような戦略の中から生まれた。女子教育に関する様々な議論と「近代的イラン女性」という新しい女性像は、「ナショナリズム」「シーア派イスラーム」「フェミニズム」「西洋の近代合理主義」といった様々な要素が複雑に絡み合い、相克しつつも混合される中で形作られてきたのである¹⁰。

以上を踏まえ、本稿では、近代イランにおける女性運動の展開について説明した後、慈善的、愛国主義的な運動と連動する女子教育推進活動を行っていた女性団体について分析することを目的としたい。まずは、女性運動の萌芽とされる男女知識人の女子教育に関する議論について、ナショナリズムとの関わりから論じる。

1. 近代イランにおける女性の活動

伝統的な女性観に基づく社会状況の中で、19世紀になると、教育の享受をはじめとする女性の権利や女性の社会的地位に言及する人々が現れる。女性運動に関する研究は、こうした女性に関する議論を残した者たちの動向を、女性運動の萌芽として捉えてきた。これらの先行研究において、女性をめぐる伝統的な社会規範に最初に疑問を投げかけた人物としてしばしば取り上げられる女性は、パーブ教運動¹¹の活動家であったゴッラトル・エイン (Fāteme Baraghāni Qorrat ol-'Ein) とガージャール朝の王女タージョッサルタネ (Tāj os-Saltane, 1884

～1936)である¹²。

女性運動の萌芽

様々な異名を持つ詩人¹³のゴッラトル・エインは、バーブ教運動の女性指導者であり、一夫多妻制とヴェールを批判し、公の場でヴェールを脱いだとされる。ガズヴィーンのモジュタヘッド (ムジュタヒド)¹⁴の娘でモッラー (イスラーム説教師)の妻であったゴッラトル・エインは、宗教的に厳格な家庭で育ち、彼女の親族の多くがイスラーム諸学を教えるマクタブ (伝統的初等教育機関)を運営していた。彼女の母親も教師 (modarres)で詩人であった。ゴッラトル・エインはイスラームの教義に良く通じていたため、宗教指導者との知的議論に参加したが、バーブ教運動が起こるとバーブ教に改宗した¹⁵。その後、バーブ教の急進的で雄弁な説教師としてバーブ教徒の一体感の高揚と軍事蜂起への傾斜を決定づけるのに重要な役割を果たしたが、1852年のバーブ教徒によるナーセロッディーン・シャー (在位:1848～1896)暗殺未遂事件の後、処刑される¹⁶。

1880年代から90年代にかけて、バーブ教やフリーメイソン (Freemason)に傾倒した何人かの知識人や改革主義者も、女性の権利を擁護した。イラン生まれの著名な思想家であるアフガーニー (Jamāl od-Dīn ol-Afghānī, 1838/9～97)¹⁷に協力したマルコム・ハーン (Mīrzā Malkom Khān, 1833～1908)¹⁸をはじめとして、ケルマーニー (Mīrzā Āqā Khān Kermānī, 1853～1896)¹⁹やルーヒー (Sheikh Ahmad Rūhī, 1846/7～1896/7)²⁰、そしてアーホンドザーデ (Mīrzā Fath 'Alī Ākhondzāde, 1812～1878)²¹といった男性の知識人は、女性解放に賛同し、女子教育を支持し、一夫多妻制に反対したと言われる。彼らは、イランの「新しい愛国者」世代の育成に関心を持ち、「母親が教育を受け、子どもの最初の教育者としての役割が認められる適切で健全な家族」が存在してはじめて、その育成が実現すると考えていた²²。彼らに加えて、ビービー・アスタラーバーディー (Bibi Astarābādī, Bibi Vazīrof)²³などの女性知識人も、法的、教育的、経済的な女性の立場と家庭における女性の地位に焦点を置きつつ「女性問題」を取り上げ、女性が家庭や社会において果たしている役割を「国民」に認識させようとした。

立憲革命期においても、ジャーナリスト、詩人、国民議会議員などの進歩的な男性知識人たちが、女性の権利を擁護している。『イスラフィーールの笛

(*Sūr-e Esrāfil*)』²⁴に掲載されたデフホダー (Dehkhodā, ‘Ali Akbar Ebn-e Khān-bābā)²⁵の風刺的なコラム、ガージャール王子であるイーラジュ・ミールザー (Jalāl ol-Mamālek Īraj Mīrzā, 1874 ~ 1924/5)²⁶の詩、『堅き絆 (*Habl ol-Matin*)』²⁷『平等 (*Mosāvāt*)』『新しいイラン (*Īrān-e Nou*)』といった新聞・雑誌に記された様々な書き手による文章は、女性たちによる運動と連帯するよう説いた。ヴァキーロル・ロアーヤー (Vakīl ol-Ro‘āyā)²⁸やタギーザーデ (Seyyed Hasan Taqīzāde, 1878 ~ 1970)²⁹のような数人の国民議会議員も女性を支援している³⁰。詩の世界においても、イーラジュ・ミールザーの他、ミールザー・アフシャール (Mohammad Hāshem Mīrzā Afshār, 1880 生)、ラーフティー (Lāhūtī, 1887 ~ 1957)³¹、ミールザーデ・エシュギー [Mīrzāde ‘Eshqī, (Mīrzāde) Mohammad Rezā Ebn-e (Hāj Seyyed) Abū ol-Qāsem Kordestānī]³²らが、従来のペルシア語詩における「女性を美しい玩具としてあるいは悪魔のように描くという伝統」を拒否すると主張した。彼らは女性の平等と解放というテーマを取り上げ、女性が男性より劣るとの支配的な見解に異議を唱え、一夫多妻と女性のヴェールを批判している³³。

こうして、知識人による女子教育必要論が形成されていく中で、ガージャール朝の宮廷女性の中から、伝統的な社会規範と女性観に対する抵抗と女性の権利を求める主張が出てきたことは興味深い。特に、タージョッサルタネは、立憲革命後、第一次世界大戦 (1914 ~ 1918) が勃発した年に『回想録 (*Khāterāt*)』を記し、その中で女性の権利を擁護したとして有名である³⁴。彼女は立憲革命期の女性団体でも活躍し、イラン近代の女性運動の起源をタージョッサルタネに辿ることができると見なす研究者もいる³⁵。

この回想録の中でタージョッサルタネは、西欧の女性の生活を紹介し、イラン女性の「後進性」を批判している。また、自身が強制されて結婚したこと、夫の不貞、墮胎の経験など、当時の社会においてタブー視されるような内容を記した³⁶。彼女は、公の場でヴェールを被らなかつただけでなく、ヴェール着用にも強く反対することを目的として回想録を書いたとも言われている。対して母親をはじめとする近親者たちは「バブ教徒に変わってしまった」と彼女の行いを非難した。その他にも彼女は「浮気者」「背教者」などと呼ばれ攻撃されたという³⁷。他方で、タージョッサルタネの回想録は、従来全く無視されてきた貧しい人々にも言及³⁸しており、重要な資料だと評価される。同回想録は、それまで意に介されなかつた女性の日常生活を詳細に記し³⁹、自分自身の生活

を論じるという比類なき自伝的性質を有しており、20世紀への転換期におけるイランの女性に関する情報を提供している⁴⁰。

この回想録においてタージョッサルタネは、愛国心の問題と結び付けた上で、女子教育の必要性を強く訴える。「子どもを養育し教育するのは母親の義務なので、女性に教育が必要」「イラン経済を発展させるためには女性の解放が必要であり、女子教育とヴェール撤廃と女性による社会的、政治的生活への完全参加が必要」などと主張し、「女子教育は女性をより善い母親にするだけでなく、女性が就労するのを助け、空虚な役に立たない生活を終わらせる」として⁴¹、以下のように述べる。

イランが倫理的欠陥を有し災難を被っている要因は、女性に教育を与えなかったことにある。……あらゆる知識の淵源は母親にあり、偉大な戦士、真の解放者、純粹なる自由愛好者は有能な母親に育てられている。……性格の鍛錬を子に伝達しうるのは善き母親であり、傑出した子女を育てるのは聡明な母親であるが、現代の母親は無知であるため、子どもたちの愛国心を失わせてしまっている⁴²。

これまで見てきたように、知識人女性による伝統的な社会規範に抵抗する動きが19世紀後半に出現した。ただしこれらは、ごく限定的で個人的な動きであり、組織的でより広い範囲で女性たちが草の根的な活動を開始したのは、イラン立憲革命の時代からである。そのため、先行研究の多くは、イランの女性運動の起源を立憲革命に見ている⁴³。

立憲革命における女性の活動

立憲革命の際、その原動力の1つとなったのは、「アンジョマン（Anjoman）」と呼ばれる団体である。アンジョマンとは、立憲革命前は主に知識人層の集まりを指したが、立憲革命後は大衆化した草の根的な組織を意味するようになる⁴⁴。アンジョマンはイラン各地で数多く誕生したが、女性により設立され女性をメンバーとする女性アンジョマン（女性団体）も多く作られた。

立憲革命により立憲制が敷かれ、国民議会が開かれるようになると、国民議会のあり方をめぐって女性団体側の不満が高まり、ウラマー（イスラーム法学者）との対立関係が明らかとなる。女性団体は、女性の権利に関する要求や政

策提言をしばしば行なったが、それらはウラマーにより「反イスラーム的」として悉く退けられた⁴⁵。それにもかかわらず、第二次立憲制の時代以降には男性たちの活動が下火になる一方で、女性たちは積極的に立憲運動に参加していくのである⁴⁶。

女性団体は、当初、国立銀行設立を目指す動きに協力して資金を収集し、欧州など外国からの借款を減少させるため、外国産衣類のボイコットや国産布地の奨励運動といった愛国主義的な活動を主に実践していった。しかし、次第に女性団体の活動内容には多様性が現れ、女性が教育を享受する権利や一夫多妻制への反対など、女性の権利や地位そのものに関わる内容へと変化していく。女性の啓蒙については、女子教育の推進活動が最も重要な課題とされ、女子教育普及を目指して婦人雑誌を媒体に女性の意識を高めることが目指された。そして、女性の識字能力向上の必要性が唱えられ、女子校の設立という形で実現が試みられた⁴⁷。つまり、立憲革命時代以降、女性活動家たちが、女子教育推進を主な目的として、女性団体を設立し、婦人雑誌を発行し、私立女子校を設立するという形態が多く見られるようになったのである。

20世紀初頭における女性運動の萌芽期に、女性活動家たちが出版活動を始めた時、女性の権利として第一に掲げたのは、女性が教育を受ける権利であった⁴⁸。このような先駆的な役割を果たした女性の中には、米国の長老派ミッシヨナリーが設立した女子校であるイラン・ベテル (Iran Bethel) 校の卒業生たちが存在する⁴⁹。しかしながら、女性にとって本来禁忌とされてきた自己表現を開始した時に女性たちが直面した社会的迫害は、伝統的な女性観や社会規範が支配的な社会の中で、とりわけ激しいものとなったのである。

レザー・シャー期における女性の活動

立憲革命以降、女性の活動が盛んになっていくが、社会からの反発を受けるなど大きな困難を伴ってもいた。特にヴェール撤廃を主張する文章を掲載した婦人雑誌に対しては、発行禁止処分などの厳しい対応が採られる⁵⁰。しかしレザー・シャー期 (1925～1941) になると、政府の女性に対する姿勢は変化し、女性を取り巻く環境は大きく変遷していく。レザー・シャーは、イランの近代化のために西欧化が必要であり、ヴェール撤廃が近代化には必然であると考え、ヴェールの代わりに西欧式の帽子を被るよう奨励した。

ただし、レザー・シャーのヴェール禁止令は、女性の社会進出を真から目指

したものではなく、イランの西欧化を内外に誇示することを意図していた。政府がヴェール禁止令を発したことにより、女性は「ヴェールを着用する自由」を奪われた。ヴェールを着用して外出すると罰せられるという恐怖感から、外出できない女性が増加したという。つまり、シャーのヴェール禁止令は、女性を家庭に閉じ込め公的な場から遠ざけるという結果を招いてしまった。また、ウラマーなどイスラーム法遵守を強調する者たちのヴェール禁止令に対する反発は強く、結果として、1941年にヴェール禁止令は撤回される⁵¹。

パフラヴィー朝期には、国民の自発的な集会や結社は解体され、立憲革命期に各地に成立していたアンジョマンも姿を消した。立憲革命を指導したウラマー層もレザー・シャー期には軍部の支配下に置かれることとなり⁵²、彼らの力は相対的に弱体化した。1930年以降、レザー・シャーの中央集権体制が強化され、思想や結社の自由が阻まれたので、女性の自発的な運動も低迷し、ほとんど全ての女性団体の活動が停止してしまう。

その一方で、レザー・シャー期には、婚姻関係における女性の法的地位の改善が図られた。レザー・シャーは、中央集権化のための官僚養成や行財政機構の充実にとっても女子教育推進が重要であると考えた。そのため、1936年、テヘラン大学が設立されると同時に女子学生の入学が許されて以降、女性の高等教育が進展していく。こうしたことから、女性の社会進出のためには女子教育が必要と考えていたザンドフト・シーラーズィー（Zandokht Shirāzi）やセディーゲ・ドウラターバーディー（Sedīqe Doulatābādi）⁵³などの女性活動家は、現実的な方策として、レザー・シャーの女子教育政策を支持したのである⁵⁴。

レザー・シャーの女子教育政策やウラマーの弱体化もあり、女子校の数がかなりの割合で増加した。ただし、女子学校教育が量的、質的に拡大したとはいえ、男子と比較すればその整備は大幅に遅れていた。また女子の場合、受けることができるのは初等教育までに限られることが多く、中等教育以上の教育を享受することは稀であった。女性教師数の絶対的な不足という問題もあった。こうした中で、女性活動家たちは女子学校教育の発展のために尽力したのである。例えば、トゥバー・アーズムーデ（Tūbā Āzmūde）などの女性活動家が女子高等教育の実現に努めたが、そのための活動は大きな困難を伴ったという⁵⁵。

2. 20世紀初頭の女性団体

前述のように、立憲革命期に組織的でより広い範囲にて女性たちが草の根的

な活動を開始し、先行研究の多くは、イランの女性運動の起源を立憲革命に見ている。女子学校教育の推進を主導した女性たちは同時に女性団体の結成にも熱心であった。そうした女性団体の設立者やメンバーには、上中流階層出身の著名な立憲派の活動家の妻子や姉妹が多く、彼女らの大半は女子校の運営や女子校での教育に携わっていた。以上のことから、立憲革命前後の時代に、女子教育の推進に尽力した主要な女性団体について、次に考察していきたい。

Afary [1996: 184-187] および Khosroupanāh [1380: 147-196] によると、資料上活動が確認できるものの中で、立憲革命の時代から 1920 年代にテヘランに設立された女性団体には、以下のようなものがある。

- 女性自由協会 (Anjoman-e Āzādī-ye Zanān, 1907 年設立)
- 女性秘密連盟 (Ettehādiye-ye Gheibī-ye Nesvān, 1907 年設立)⁵⁶
- 女性協会 (Anjoman-e Nesvān)⁵⁷
- 孤児協会 (Anjoman-e Ītām, 1910 年設立)
- 祖国の貞節な淑女協会 (Anjoman-e Mokhaddarāt-e Vatan, 1910 年設立)⁵⁸
- イラン婦人慈善協会 (Sherkat-e Kheiriye-ye Khavātīn-e Īrān, 1910 年設立)⁵⁹
- イラン婦人協会 (Anjoman-e Khavātīn-e Īrān, 1910 年設立)⁶⁰
- 女性連盟 (Ettehādiye-ye Nesvān, 1911 年設立)
- イラン女性努力協会 (Anjoman-e Hemmat-e Khavātīn-e Īrānī, 1911 年設立)
- 中央女性委員会 (He'iat-e Khavātīn-e Markazī, 1911 年設立)
- 7人の婦人協会 (Anjoman-e Haft Khavātīn, 1916 年設立)
- イラン愛国女性協会 (Jam'iyyat-e Nesvān-e Vatankhāh-e Īrān, 1923年1月31日設立)

女性団体の設立はテヘランだけに限定されていたのではない。例えば、イラン北西部のアゼルバイジャン地方には 1906 年秋に女性団体が設立され⁶¹、中部エスファハーンの女性たちは「エスファハーン女性委員会 (He'iat-e Nesvān-e Esfahān)」を設立している⁶²。

Khosroupanāh [1381: 148-196] に従うと、これらの中でも、女子校と密接な関係を有し、愛国主義的な運動と連動する女子教育推進活動を行っていたという観点から特に重要であったのは、「孤児協会」、「祖国の貞節な淑女協会」、「イラン女性努力協会」、「イラン愛国女性協会」の 4 団体である。このうち、特に慈善的性格の強い「孤児協会」については別稿で説明する予定であり、本

稿では「祖国の貞節な淑女協会」と「イラン女性努力協会」に関して説明する。「イラン愛国女性協会」については、紙幅の都合上、次稿において詳解することとしたい。

祖国の貞節な淑女協会（Anjoman-e Mokhaddarāt-e Vatan）

1909年12月、一部の進歩主義的な女性たちが、イラン社会の社会的、文化的領域への女性の参画実現を目指して行動を起こした。政府要職にある政治家たちや政治的、社会的活動家らを数度に渡り会合に招待して、自らの活動を宣伝したのである⁶³。これに基づき、1910年3月に「祖国の貞節な淑女協会」が設立され、最初の会議で同協会の管理運営委員会（Hei'at-e Modir）が結成された⁶⁴。管理運営委員会のメンバーは、以下の通りである⁶⁵。

委員長（ra'is）：ハーディー・ナジュマーバーディー（Aqā Sheikh Hādī Najmābādī）の娘バーヌー・アーガー・ベイゴム（Bānū Āghā Beigom）

会計係（khazāne-dār）：バーヌー・アーガー・シャーフザーデ・アミーン（Bānū Āghā Shāhzāde Amīn）

書記（monshi）：セディーゲ・ドウラターバーディー

「祖国の貞節な淑女協会」の会員として名を連ねていたのは、ナーセロツディーン・シャーの娘〔エズツサルタネ（‘Ezz os-Saltane）とアズィーゾツサルタネ（‘Azīz os-Saltane）〕や妻〔ザフラー（Zahrā khānom）とマフブーボツサルタネ（Mahbūb os-Saltane）〕など、主に有力者の家庭の女性たち⁶⁶であったが、商人の妻や娘⁶⁷なども参加している。例えば、タバコ販売業者のアサドラー（Āqā Mirzā Asad-ollāh）の妻は、同団体の管理運営委員会の一員であった。

同委員会は、自らの活動の普及や目的の推進のため、祝賀会を開催したり、「庭園パーティー（Gardan Pārtī）」を開いて演劇上演などの娯楽的なプログラムを挙行したという。これらは、生活環境が家庭に限定されている女性たちの興味を惹きつけただけでなく、女性たちが公の場に出るための練習台にもなった⁶⁸。

女性たちを組織し女性の権利の擁護を目指した同協会の設立目的は、女性に関係する公共サービスや慈善活動、外国製品ボイコット、国産織物の普及を

実現させることであったが、中でも、同協会の政治的問題への参画が中心的な関心事であった。同協会の会議では、管理運営委員会の計画に従い、何人かの会員が演説を行った。その演題の多くは、女性の状況や問題の提示と女性の権利の必要性であり、国の政治的問題や国家の責任について語る場合もあったという。例えば、1910年5月21日の会議での演説で、委員長はイランの「後進性」を指摘した。彼女は、女性たちに団結を促し、祖国の問題の多くは「実質的な同盟や団結の欠如に起因しており、それらの根源は国民大衆の無知や無学 (jahl va bi-'elmī-ye 'ämme-ye mellat) である」として女子教育の必要性を説き、内閣や国民議会が国の諸問題解決に対して手を拱いていることを批判した⁶⁹。

ただし、その中心的な会員と会議での演説者は、女性活動家の他、ウラマー、名士など名のある知識人に限られていた。管理運営委員会は、同協会の活動を普及させるために、会議に参加して欲しいとして一般の女性たちを招待した。だが、これら会議の内容は講演会や同協会の宣伝活動に限られていたので、大部分の招待客は会議に参加しなかった。同協会の管理運営委員会は、一般の女性に関心を示さず、協力や支援を行わないことに不満を募らせたという⁷⁰。

イラン女性努力協会 (Anjoman-e Hemmat-e Khavātin-e Īrānī)

ガージャール朝最後の国王、第7代アフマド・シャー (在位：1909～25) が即位し、1914年12月4日には第三次国民議会が召集され、ナーイェボツサルタネ (Nāser ol-Molk Nāyeb os-Saltane) による「独裁の時代 (doure-ye diktātorī)」が終了したとされる⁷¹。すると、このような政治的变化によって、女性の権利を擁護する女性活動家の集団やテヘランの女子校校長や教師らが、女子教育推進という目的のために女性団体を設立する動きが促進された。

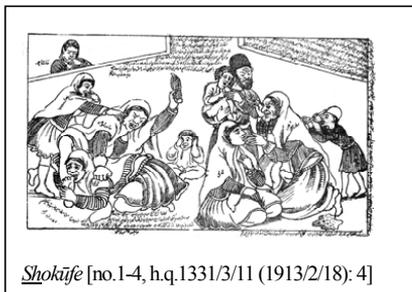
1915年4月30日に、女子校総視学官 (mofattesh-ye koll-e madāres-e dokhtarān) のヌーロッドジャー (khānom-e Nūr od-Dojā) という女性の尽力により、女子校校長や女権擁護の活動家からなる集団が集まり、「イラン女性努力協会」の設立会議が執り行われた⁷²。同協会は『花 (Shokūfe : 1912～16)』という婦人雑誌と密接な関係を有しており、『花』には同協会に関する記事や同協会から出された意見などが多数掲載されている⁷³。1915年発行の『花』3年目第11号⁷⁴によると、その設立会議において、ヌーロッドジャーが国家に対する危機意識と愛国心を有する必要性を指摘し、国政における「男性たちのやり方」を批判、女性たちにこうした問題に関して声を上げるよう呼びかけた。そして、祖国を

守るための外国製品ボイコット・国産織物使用奨励を活動目的とし、その活動を女子校から発信していくことが決定された。具体的には、会議の出席者の多くは女子校校長だったので、女子校側は生徒たちに国産織物を身につけるよう指導し、それに従わない時はいつでもその生徒を退学させ、他の学校もそのような生徒を受け入れないようにするとした。さらに、国産織物使用を普及させようと努力してきた男子校の校長たちに、同協会に協力し、その活動を支持するように要請している。

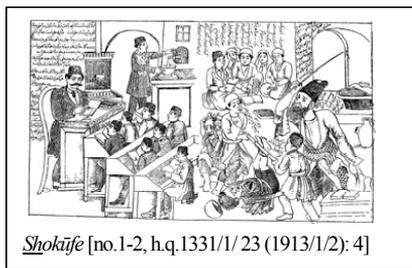
図：『花』の記事と風刺漫画の一部



Shokufe [no.1-15, h.q.1331/10/5 (1913/9/7): 4]



Shokufe [no.1-4, h.q.1331/3/11 (1913/2/18): 4]



Shokufe [no.1-2, h.q.1331/1/23 (1913/1/2): 4]

「イラン女性努力協会」は、1915年6月に自らの目的を詳細な報告の形でまとめ、同協会の長であるヌーロッドジャーの署名がついたコミュニケ（声明書）の形にして、『花』の3年目第12号に掲載した。これによると、同協会の設立目的は、少女たちや学校の生徒たちの「手仕事 (honar-hā-ye yadi, 手工芸

技術)」を進歩させることであり、中でも国産製品の普及、特に国産織物の普及が中心的な活動目的であるとされた。また、国産織物を行き渡らせるための最善策は、女性たち、特に女子校の生徒に国産織物を浸透させることであると、このような国産織物使用の訴えをテヘランの多くの人々が歓迎しているとも指摘⁷⁵、女子生徒の手仕事技術の向上のために、値段の安い彼女たちの作製した製品を買う必要があると強調している。そのため、衣服に使われるレースについては、バーザール（市場）から買うのではなくて、女子生徒により作製され欲しいサイズ・形・値段を具体的に要求できる品物を買うように求め、女子生徒たちに対しては、迅速に、あらゆる種類の衣服をできる限り美しく注意深く作製するよう奨励した。そして、女子校の中で決められた販売所に配置し値段をつけて、『花』を媒介にして広告するよう女性たちに提案し、そうすれば女子生徒が作製した品物も売れるであろうと記している⁷⁶。

外国産織物のボイコットと国産織物推奨運動に対する「イラン女性努力協会」の活動の影響は、おそらく限定されてはいたものの、イラン人の間にナショナリズムを高揚させるのに貢献したという。同協会の愛国主義的な姿勢は強固であり、上記のコミュニケは「祖国を愛するイラン人は、自国の資本を外国製品の購入に使い果たし祖国の経済を弱体化させてしまうことを許さない」と主張する⁷⁷。

テヘランの女子校校長たちは、生徒が国産織物で作製された衣服を着用して登校するように注意を払った。テヘランの女子校における国産織物普及の活動は容易に達成され、『花』3年目第13号にあるように、1915年5/6月の時点までに、女子生徒は皆、国産織物の衣服を身につけるようになっていたという⁷⁸。

「イラン女性努力協会」は国産織物使用と外国製品ボイコットの宣伝のために、講演会を開催している。これら講演会で同協会のメンバーは、国産品を利用することで得られる政治的、経済的な効果、そして同協会の活動について説明した。さらに、国民の利益を守るためにイラン人全てが努力する必要があると強調し、経済的疲弊や対外関係といったイラン社会が抱える様々な問題を指摘した。1915年8月13日の『花』3年目第15号の記事によれば、モザイヤニーエ (Mozayyaniye) 女子校の副校長 (nâzeme) は、同協会の会議において、「信仰から生み出される国への愛情」という演説を行った。この演説において、国の経済力の脆弱性と無力は「男性による間違った監督」が原因であるとし、「男性たちによる国の管理の方法 (modiriyat va keshvardâri-ye mardân)」を

批判している⁷⁹。1915年9月24日の『花』3年目第18号の記事によれば、この女性団体のメンバーの一部は、女性が国の問題に参画する必要性を唱え、「国による家父長制的な管理」に対し、「国の財産や独立の保全は夫以上に我々女性が行ってきている」と主張した⁸⁰。とはいえ、同協会が団体として政治的な領域で活動を行うことや女性の政治参画を要請することはなく、同協会の活動は最初から最後まで国産織物普及と外国製品ボイコットという愛国主義的な活動に限定されていたという⁸¹。

第一次世界大戦中、英露およびオスマン帝国の軍隊がイランに侵攻した時、イランの中央政府には安全を確保する能力がなく、連絡路は不安定になり、商人たちは織布をテヘランに輸送できなかった。そこで同協会のメンバーたちは、テヘランのバーザールに残っている国産織物の在庫を確認し、バーザールで必要とされる織布の種類を特定して、商人や様々な地域の織物工場主と連絡を取り、彼らに注文し、必要な追跡調査をし、荷物をテヘランに送る、などの活動を行い、情報伝達や国産織物の小売も請け負っている⁸²。同協会のこうした愛国的な活動に触発されて、女性が働くための織布工場設立の計画を立てる女性も出現した⁸³。

同協会の国産織物普及運動における成功に刺激され、そのメンバーたちは輸入品ボイコットの範囲を拡大し、砂糖（qand）や茶などの他の商品もボイコットの対象にしようとした。しかし、国産の代用品がなかったために、砂糖や茶のボイコット運動は歓迎されず、失敗に終わった⁸⁴。その対案として、北西部ザンジャン地方のナイフや鋏といったイラン国産の伝統工芸品の普及運動が提案された⁸⁵。しかしながら同協会は、自らの活動を持続していく中で、国産の工芸品は必要とされる生産能力や望ましい品質を有していないことを理解した。また、外国産織物ボイコットを完全に実行し継続させるのは不可能であることを悟った。それ以降、国家が財政的な赤字を黒字に転換させるよう努力する必要性を唱えるようになっていく⁸⁶。

むすび

本稿では、女性運動の萌芽とされる男女知識人の女子教育に関する議論についてナショナリズムとの関わりから論じ、立憲革命前後に愛国主義的運動と連動する女子教育推進活動を行っていた女性団体について検証した。

19世紀後半にイラン女性たちが声をあげ始めて以来、女性の識字教育を推

進し教育機会の可能性を用意することは、彼女らが目指す目的の中で、最も基本的で重要なものであった。イスラーム法（シャリーア）に基づく女性観と男女の空間分離という社会規範が支配的な状況において、女性の権利の中でも、教育を受ける権利であれば、イスラームと結び付けた道徳の涵養を理由に、女子教育の推進を主張できる見込みがあったためである。女性たちが女性の権利を要求する場合に、女子教育の実現は、女性の社会進出や政治参画といった他の要求に比べれば、イスラーム法の厳守を主張する保守的な者たちからの攻撃を避けられる可能性が比較的高かったといえる。とはいえ、女子教育推進のための活動も、保守的な人々からの激しい攻撃を受けた。

女性団体に参加し、女子教育推進や愛国主義的、慈善的な活動に尽力していた女性たちの階層としては、当初、上流家庭の教養のある者たちが主であったが、次第に多様な層の女性たちが参加するようになっていく。女性活動家たちが、識字以外に女性に必要と認識した教育内容は、男性に必要とされたものとは違っていた。女子教育に関する議論の中で重視されたのは主に家庭における妻・母としての役割である。国の将来を担う子どもたちの最初の教師となる女性たちに教育が必要と謳われ、祖国を構成する重要な要素である家族（子どもと夫）を養育するのは母・妻となる女性だと主張される。結果、女性には「家庭における母・妻の役割」や「イスラームに基づく適正な道徳心」を重視する教育内容となった。

当初、女子教育にほとんど関心を示さなかった国家は、女性活動家たちの要請に答える形で少しずつ女子教育に取り組み始める。レザー・シャーは女子教育推進政策を採用するが、しかしそれは女性の権利を擁護したわけではなく、中央集権強化・西欧化・近代化誇示のための施策であった。ただ女子教育は数、量、質的に圧倒的に不足していたために、女子教育拡大を目指す女性活動家たちは現実を見て、シャーによる女子教育推進策を歓迎したのである。

近代性と女子教育推進活動が交錯する中で、女性活動家たちが試行錯誤し生み出した「近代的イラン女性」や、ナショナリズム（特に愛国主義）重視の姿勢は、女性の権利としての教育を要求するための戦略として生み出されたものである。1930年代以降「近代的イラン女性」は政府に利用されたが、女性たちもこうした状況を逆手に取り、女子教育の拡大を実現させた。そして、困難な現実には遭遇しながらも挑戦し続けるイラン女性の逞しさは、当時と変わらず現代イランにも受け継がれている。

- 1 拙稿「近代イランの婦人雑誌と女子教育」『横浜市立大学論叢』第63巻第1号、2012年2月、71～116頁；女性のヴェールについては、拙稿「紀行文——2011年末のイランを訪問して①」『中東研究』第513号、2012年2月、142頁、注9参照。
- 2 Rostam-Kolayi, Jasamin Karin, *The Women's Press, Modern Education and the State in Early Twentieth-Century Iran, 1900-30s* (Ph.D. Dissertation, University of California), 2000, p. 72
- 3 1905年12月より民衆蜂起が始まり、第一次立憲制(1906年10月～1908年6月)、モハンマド・アリー・シャーの反革命クーデタ(1908年6月)、小専制(1908年7月～1909年7月)、第二次立憲制(1909年7月～1911年12月)という経過を辿る。
- 4 拙稿「20世紀初頭テヘランにおける女子校設立と女子教育政策」『イスラム世界』第64号、2005年3月、21～46頁
- 5 拙稿「イランにおける女子近代教育の発展と女子教育に関する言説」『イスラム世界』第73号、2009年9月、29～58頁
- 6 拙稿「シーア派イスラームの女性観——イランにおける女子教育に関する議論の展開」『駒澤大学佛教学部論集』第41号、2010年10月、276～296頁
- 7 拙稿「女子教育と識字——「近代的イラン女性」をめぐる議論とナショナリズム」『歴史学研究』第873号、2010年11月、49～60頁
- 8 拙稿「1910年代イランで女性により発行された定期刊行物——『ダーネシュ』と『ショクーフエ』」『国際文化研究』第6号、2002年12月、123～37頁；『イスラム世界』第73号、46～56頁
- 9 拙稿「イランにおける大衆運動への女性参加」『中東研究』第505号、2009年9月、76～93頁；「イラン映画に見る女性と若者たち——現状打破のための挑戦」『中東研究』第506号、2009年12月、99～111頁参照。
- 10 拙稿『歴史学研究』49頁
- 11 Keddie, Nikki R., *Iran, Religion, Politics and Society*, London: FRANK CASS, 1981, p. 50；クマリー・ジャヤワルダネ『近代アジアのフェミニズムとナショナリズム』新水社、2006年、73頁によると、シーラーズのセイイェド・アリー・モハンマド(パーブ, Seyyed 'Ali Mohammad, 1819/20～50)によりイランで創設されたパーブ教は、社会正義の拡大、商取引の自由や私有財産権の擁護、不当な税の撤廃などを訴え、女性の地位向上、一夫多妻の制限、女性に対する暴力の禁止や女子教育のための措置などを含む改革を唱えた。Najmabadi, Afsaneh, "Women's Education in the Qajar Period", *Encyclopædia Iranica*, vol.7., Costa Mesa, California: Mazda Publishers, 1998, pp. 233-234によると、パーブの死後、後継者として指導権を掌握したバハー・オッラー(Bahā-ollāh, 1892没)の興したバハーイー教は、異端とされ迫害されながらも反体制的な知識人や女性から支持された。タルビヤテ・バナート(Tarbiyat-e Banāt)校は、バハーイー教徒によって1911年にテヘランに設立された女子校である。以上のことから、女性運動という視点から研究する研究者は、パーブ教運動が女性運動に与えた影響を重視するが、黒田卓「近代イランとパーブ運動」間野英二編『アジアの歴史と文化・西アジア史』9、2000年、246～258頁などのパーブ教に関する歴史研究はこ

うした見解に否定的である。

- 12 中西久枝『イスラムとヴェール——現代イランに生きる女たち』晃洋書房、1996年、38～39頁；ジャヤワルダネ、72～74頁；Bayat-Philipp, Mongol, “Women and Revolution in Iran, 1905-11”, ed. by Lois Beck and Nikki Keddie, *Women in the Muslim World*, Cambridge: Harvard University Press, 1978, p. 296; Milani, Farzaneh, *Veils and Words: The Emerging Voices of Iranian Women Writers*, New York: SYRUCUSE UNIVERSITY PRESS, 1992, pp. 78-80
- 13 「Qorrat ol-'Ein (目の慰め)」の他にも、「Zarrin Taj (金の冠)」「Tüti (鸚鵡)」「Tâhere (清浄なるもの)」などの異名を有した。
- 14 イジュティハード (法の見解) の資格を有する高位のイスラーム法学者。
- 15 Farrokhzād, Pūrān, *Kārnāmā-ye Zanānkārā-ye Īrān*, Tehrān: Nashr-e Qatre, 1380, 637-640; Milani [1992: 77-99]
- 16 黒田 [2000: 254-255]
- 17 イスラームによる改革と反帝国主義運動を組織した有名な思想家、革命家。実際にはアサダーバード出身だが、シーア派の枠を超えた活動を展開することを目的として、「アフガーニー (アフガニスタン出身であるという意)」と自称した。1871年にカイロに定住し、専制反対、立憲要求、対ヨーロッパ抵抗の立場で、秘密結社を組織した。1884年、パリでムハンマド・アブドゥフと共にアラビア語の政治評論誌『固き結合 (*al-'Urwa al-wuthqā*)』を第18号まで刊行した。イスラーム世界各地に導入され、強烈な帝国主義批判と抵抗闘争におけるムスリム連帯を訴えた同書は、人々に多大な影響を及ぼした。1880年代後半、ガージャール朝のシャーの招きでイランに帰国したが、1890年に追放され、これを機にタバコ・ボイコット運動 (1891) とナーセロディーン・シャー暗殺事件 (1896) が起こった。
- 18 エスファハーンのアルメニア人家庭に生まれた改革思想家であり、宗教権力に反対した。1843年仏国に留学し、帰国後フリーメイソン組織を結成したために、1861年にイランから追放された。ジャヤワルダネ [2006: 74-75]によると、ロンドン滞在中の1890年、『法 (*Qānūn*)』を発行し、イラン政府を批判した。この新聞にはアフガーニーも寄稿した。1890年の『法』において、マルコム・ハーンは、女子教育推進を提唱する記事を執筆した。
- 19 バーブ教徒、急進的な自由思想家、著名な作家。アフガーニーの協力者で、1876年イスタンブルで創刊されたペルシア語新聞『星 (*Akhtar*)』の編集者であった。Najmabadi, Afsaneh (ed.) 1990, *Women's Autobiographies in Contemporary Iran*, Cambridge: Harvard University Press, 1990, p. 19によると、イランにおいて、「女性問題」を広範囲に渡り論じた最も初期の政治的著書『百の説教集 (*Sad Khotbe*)』を残した。同書にて、女性隔離とヴェール、一夫多妻、一時婚という慣習を批判しながら、イランにおける女性の「嘆かわしい状況」を指摘。ケルマーニーは、部族女性を賞賛しながら、都市女性を部族女性やヨーロッパ女性と比較、都市女性の制限された状況を批判。また、女性隔離とヴェールは、女性の非識字と無知に原因があると批判し、一時婚と一夫多妻により人口成長率が低くなり、子ども殺しが増加し、夫の心を

- つかむために女性たちが策略や迷信に目を向けるようになってしまうと警告した。
- 20 作家で教師であったルーヒーは、パーブ教徒で自由思想家でもあったが、1891年にケルマーニーとともに、当時イスタンブルに在住していたアフガーニーによるイラン人改革派グループに参加した。
- 21 アーホンドザーデ (ペルシア語での発音。アゼルバイジャン語では「アフンドザーデ」) は、ロシア領トランス・コーカサスに居住していたアゼルバイジャン地方出身のアーゼリー系イラン人で、啓蒙思想家、作家。19世紀末イランの状況を批判する哲学的著作『キャマーリュドウレ書簡』はペルシア語に訳され (ペルシア語で『キャマーロッドウレ (Kamāl od-Doule) 書簡』)、近代イランの思想に影響を与えた。ザカフカースのシャキに生まれたが、子ども時代をアルダビール近郊で送った。アルダビールへの思いは強く、民族主義を含む政治思想面で、イランの知識人に多大な影響を与えた。Najmabadi [1998: 233-234]によると、アーホンドザーデは、イスマエール派信徒やパーブ教徒たちが、娘と息子を同様の方法で教育していることを賞賛した。
- 22 Bayat-Philipp [1978: 296-297]; ジャヤワルダネ [2006: 75]
- 23 Farrokhzād [1380: 181-182]によると、彼女の詳細な生没年は不明であるが、ヒジュラ暦14世紀前半 (20世紀前半) に活躍したことが知られている。ビービーは識字能力を有する教育愛好者で、生涯を教育活動に費やした。1891/2年頃、ナーセロッディーン・シャーに仕える高官が記した女性を批判する内容の『女性への懲罰 (Ta'dib-e Zanān)』が都市部において普及していたが、これに対抗してビービーは、ナーセロッディーン・シャーの暗殺の少し後の時期である1895/6年に『高官の欠点 (Ma'āyeb or-Rejāl)』を記して男性を批判した。彼女は4章にわたって、酒飲みの男性たちの振る舞い、賭博、ハシーシ・インド大麻・アヘンの害、「ごろつきども」や任侠の徒に流行している汚い言葉といった男性たちの欠点について記し、その風刺画も巧みに描いている。ビービーはサニーノッドウレ (Sanī'od-Doule) が教育大臣であった時代に、ダベスターネ・ドゥーシーゼガーン (Dabestān-e Dūshizegān, Dokhtarāne va Dūshizegān-e Irān) 女子校を設立した。また、Farrokhzād [1380: 878-9]によると、ビービーの娘のアフザル・ヴァズィーリー (Afzal Vaziri) は、1889/90年か1891/2年に生まれ、1980/1年にテヘランにて約90年の生涯を閉じた。女性の権利を求める多くの記事を書き、女性の権利の擁護、結婚問題、女子教育や女性の仕事などに関する彼女が書いた文章の多くは当時の有名な出版物に多く掲載されている。この母娘の著作については、Najmābādi, Afsāne (ed.), *Bibi khānom Astarābādi va khānom-e Afzal Vaziri: Madar va Dokhtari az Pish-gāmān-e Ma'āref va Hoquq-e Zanān*, Chicago: Midland Press, 1375 (以下、「*Bibi Astarābādi va Afzal Vaziri*」) と表記)。
- 24 イスラームでは、4人の大天使のうちの一人であるイスラフィーールが、最後の審判の際に笛を吹くと考えられる。
- 25 著名な文学者、作家。テヘランに1879/80年頃生まれ、1955/6年没。ホルージェルディー (Sheikh Gholām-Hosein Borūjerdi) の下で文学を学び、その後、政治学校 (Madrāse-ye Siyāsī) で学習した。

- 26 ガージャール朝第2代ファトフ・アリー・シャー (在位: 1797 ~ 1834) の孫で、詩人のゴラームホセイン・ミールザー (Sadr osh-Sho'arā' Gholām-hosein Mirzā) の息子。ペルシア語、アラビア語、仏語に精通、露語・トルコ語も知っていた。タブリーズのダーロル・フォヌーン (Dār ol-Fonūn) で学んだ。詩も残したが、特に初期においては政治的な活動も行っており、教育省 (Vezārat-e Ma'āref) において活動した。ダーロル・フォヌーンについては、拙稿『イスラム世界』2005年3月、24頁参照。
- 27 「堅き絆 (*Habl ol-Matin*)」とはクルアーンを指す。
- 28 Bayat-Philipp [1978: 305]; Afary, Janet, *The Iranian Constitutional Revolution, 1906-11, Grassroots Democracy, Social Democracy, and the Origins of Feminism*, New York: Columbia University Press, 1996, p. 152 によると、ハマダーンのリベラルな商人で第一次国民議会議員であった。
- 29 タブリーズのウラマーの家系に生まれた政治家、学者。西欧式の教育や海外旅行により、西欧的な政治思想に傾倒した。第一次国民議会においてアゼルバイジャン地方から議員に選出された。モハンマド・アリー・シャーの反革命クーデタ後ヨーロッパへ亡命していたが、第二次国民議会ではデモクラート党の指導者として活躍した。
- 30 Afary [1996: 178, 201]
- 31 ケルマーンシャーに生まれた近代イランを代表する愛国主義的な詩人。活発な政治活動に基づいた危機意識の高い愛国思想を盛り込んだ詩を多数残し、亡命先のソヴィエト領内では、タジキスタン共和国の指導的文学者として、タジク文化の発展に大きな影響を与えた。
- 32 ハマダーンに1893/4年に生まれ、テヘランにおいて1924年没。文学と詩を学び、愛国主義的、自由主義的傾向を有した。第一次世界大戦中にオスマン帝国へ行き、現地のダーロル・フォヌーンで学んだ。『20世紀 (*Qarn-e Bistom*)』紙をテヘランにて発行。
- 33 ジャヤワルダネ [2006: 75]
- 34 Mahdavi, Shireen, "Taj al-Saltaneh, an Emancipated Qajar Princess", *Middle Eastern Studies*, no.23, 1987, pp. 188-193 によると、タージョッサルタネはナーセロッディーン・シャーの娘で、母は彼と同じ支配家系の出の低位の妃トゥーラーノッサルタネ (Tūrān os-Saltane) であった。トゥーラーノッサルタネの父 (Mohammad Mirzā Motazed od-Doule) は、ファトフ・アリー・シャーの息子のアッバース・ミールザー ('Abbās Mirzā) の孫の系列であったが、ナーセロッディーンとトゥーラーノッサルタネの結婚は一時婚の形式であった。Milani [1992: 224-225] によると、タージョッサルタネは、父王のハレムで育ち、ペルシア語と仏語に堪能で西洋文学に精通し、ピアノとタール (太鼓) を奏で、絵を描いた。タージョッサルタネの回想録は Tāj os-Saltane, *Khāterāt-e Taj os-Saltane*, Mansūre Ettehādiye and Sirūs Sa'dvandīyān (eds.), Tehrān: Nashr-e Tārīkh-e Īrān, 1361; Tāj os-Saltane, *Khāterāt-e Taj os-Saltane*, Mas'ūd 'Erfāniyān (ed.), Tehrān: Nashr-e Tārīkh-e Īrān, 1378; その英訳は Taj al-Saltana, *Crowning Anguish: Memoirs of a Persian Princess from the Harem to Modernity, 1884-1914*, edited with Introduction and Notes by Abbas Amanat, Translation of the

Memoirs by Anna Vanzan and Amin Neshati, Washington DC: Mage Publishers, 1993; この英訳の日本語訳は、タージ・アッサルトタネ『ペルシア王宮物語——ハレムに育った少女』アッバース・アマーナト編、田隅恒夫訳 平凡社、1998年。

- 35 タージョッサルトタネの回想録の編者アッバース・アマーナト ('Abbās Amānat) は、Taj al-Saltana [1993: 11-14] の解説の中で、彼女を「立憲革命後に新しく生まれた脱宗教的な知識人のうちの代表的な1人」と評価するのみならず、「変革の時代における自身の文化と社会の困難な状況を映し出した1人の熱心な女性解放論者」と位置づけている。彼女は、仏文学や革新的な言辭、そしてジャーナリズムにより感性を造りかえられた結果、モダンなファッション、化粧、饗宴、音楽、家具、奢侈品、建築などにより生活様式を改造し、回想録においては、特権と陰謀が支配するハレム、貴族社会、官吏社会の問題点と虐げられた女性の姿を描き出そうとした。アマーナトは、タージョッサルトタネの行動と書き残したものには、後のレザー・シャー時代の女性解放運動に通ずるものが先取りされていると記す。
- 36 中西 [1996: 38-39]
- 37 Milani [1992: 97]
- 38 Taj al-Saltana [1993: 13]
- 39 Milani [1992: 224-225]
- 40 Najmabadi [1990: 17, 21-22]
- 41 Tāj os-Saltane [1361: 7-8]
- 42 Tāj os-Saltane [1361: 7-8]
- 43 Milani [1992: 61, 63]; Bayat-Philipp [1978: 295-308]; Afary [1989: 65-87]; Sanasarian, Eliz, *Women's Rights Movement in Iran Mutiny, Appeasement, and Repression from 1900 to Khomeini*, New York: Praeger Publisher, 1982
- 44 Afary [1989: 68-69]; 黒田 [1994: 531-532]によると、本来は「集会・結社・団体」を意味したが、立憲革命時代に「政治的結社」の意味で用いられるようになった。
- 45 中西 [1996: 39-40]
- 46 Moghissi, Haideh, *Populism and Feminism in Iran*, London: MACMILLAN PRESS LTD, 1994, pp. 29-30
- 47 中西 [1996: 40-41]
- 48 中西 [1996: 35-37]
- 49 Afary [1989: 71]; Bahar, Sima, "A Historical Background to the Women's Movement in Iran", ed. by Farah Azari, *Women of Iran: The Conflict with Fundamentalist Islam*, London: Ithaca Press, 1983, p. 175
- 50 拙稿『横浜市立大学論叢』98～104頁
- 51 中西 [1996: 43-44]
- 52 加賀谷寛「タバコ・ボイコット運動からイラン革命まで」『イラン現代史』近藤出版社、1975年、88頁
- 53 セディーゲ・ドウラターバーディーの著作については、San'atī, Mahdokht and Afsāne Najmābādī (ed.), *Sediqe Doulatābādī: Nāme-hā, Neveshte-hā, va Yād-hā*, 3 vols.,

(168) 近代イランの女性団体——女子教育推進とナショナリズム (山崎)

Chicago: Midland Press, 1377 (以下、「*Sedīqe Doulatābādī*」と表記)。セディーゲ・ドゥラターバーディーについては、拙稿「20世紀前半イランにおける女性活動家たちの闘争——女子教育推進をめざして」「女性百年」刊行委員会編『女性百年——教育・結婚・職業——いかに生きたか、いかに生きるか』東北大学出版会、2009年3月、139頁～154頁参照。

- 54 中西 [1996: 43-45]によれば、レザー・シャー期には、一夫多妻制は廃止されなかったが、婚姻法と離婚法の改正が何度も行われた。結婚契約書の遵守が義務となり、夫は結婚時に、既に妻帯か否かを結婚相手に伝えることも義務づけられた。思春期に達していなければ結婚できないとも定め、幼年婚を防止しようとした。ただし、思春期の基準は明確ではなかったという。
- 55 彼女は、1940年になるまで女子高等教育は実現しなかったと述べている。Farrokhzād [1380: 39]
- 56 強い革命主義的傾向を有す。
- 57 テヘランにおいて、第一次立憲制期と第二次立憲制期に活動。女性団体容認の議題を取り上げる同団体の声明が第一次国民議会において議論された。
- 58 立憲派の指導者たちと密接な関係を有し、1911年のデモで重要な役割を果たした女性たちをメンバーに含んでいた。
- 59 学校、病院、孤児院などのための資金を提供。
- 60 学校、病院、孤児院などのための資金を提供。
- 61 Afary [1996: 184]によると、*Revue du Monde Musulman*, no.2, 1907, p. 213は、1907年2月までに、150人の女性たちが団体を組織したと伝えている。
- 62 Afary [1996: 184]
- 63 このような会合の1、2回目はアーガー・カーゼム・タブリーズイー (Āqā-ye Kāzem Tabrizī) の住居、3回目はモハッデラーテ・エスラーミーエ (Mokhadderāt-e Eslāmiye) 校、4回目はモバーレケ・シャーアーバード (Mobārake-ye Shāh-ābād) 校、5回目はハヴァーティーン (Khavātin) 校で開催。6回目の会合は、1910年3月8日火曜日にパルデギヤーネ・エスラーミー (Pardegiyān-e Eslāmi) 校にて開催された。*Rūznāme-ye Īrān-e Nou*, no.1-156, h.q.1328/3/3 (1910/3/15), p. 2
- 64 *Rūznāme-ye Sharq*, no.79, h.q.1328/4/21 (1910/5/2) ; *Rūznāme-ye Vaqt*, no.27, h.q.1328/6/22 (1910/7/1), p. 2によると、この女性団体の設立メンバーには、エエテマードルホクマー (E'temād ol-Hokmā') の娘と妻、アミール・パンジェ (Amīr Panje, 50人の兵士の隊長) の妻ドゥラトツサダフ (Dorrat os-Sadaf)、アミール・トゥーマーン (Amīr Tūmān, 旅団長、一万人からなる軍団の長) の妻ハディージェ (Khadije)、モヴァッサコッサルタネ (Movassaḡ os-Saltane)、ミールザー・マフムード・ハーン・モストウフィー (Mīrzā Mahmūd Khān Mostoufī) の娘ゼイナブ (Zeinab) などがいたという。
- 65 Khosroupanāh, Mohammad Hosein, *Hadaf-hā va Mobāreze-ye Zan-e Īrāni az Enqelāb-e Mashrūte tā Saltanat-e Pahlavī*, Tehrān: Nashr-e Payām-e Emrūz, 1381, pp. 149-150
- 66 *Rūznāme-ye Sharq*, no.79, h.q.1328/4/21 (1910/5/2), p. 3

- 67 ファーテメ (Fāteṃe) やゴヴヴァト (Qovvat) という名の女性が参加
- 68 *Khosroupanāh* [1381: 152]
- 69 *Rūznāme-ye Sharq*, no.79, h.q.1328/4/21 (1910/5/2), p. 4
- 70 *Rūznāme-ye Sharq*, no.79, h.q.1328/4/21 (1910/5/2), p. 3
- 71 Afary [1996: 319, 320, 336] 参照。
- 72 *Khosroupanāh* [1381: 172-174]
- 73 拙稿『横浜市立大学論叢』79～83頁参照。
- 74 *Shokūfe*, no.3-11, h.q.1333/7/1 (1915/5/15), pp. 2-4
- 75 同じ記事によれば、この女性団体が設立されてから5週間で5000人がこの活動に参加し、その他のものたちも、ゾロアスター教徒たちのバーザール (Bāzār-e Zardoshtiyān) に国産織物がほとんどなくなるまで、この運動に参加したという。
- 76 *Shokūfe*, no.3-12, h.q.1333/7/23 (1915/6/6), p. 2
- 77 *Shokūfe*, no.3-12, h.q.1333/7/23 (1915/6/6), p. 2
- 78 *Shokūfe*, no.3-13, h.q.1333/8/21 (1915/7/4), p. 4
- 79 *Shokūfe*, no.3-15, h.q.1333/10/2 (1915/8/13), p. 2
- 80 *Shokūfe*, no.3-18, h.q.1333/11/15 (1915/9/24), p. 2
- 81 *Khosroupanāh* [1381: 177-178]
- 82 *Shokūfe*, no.3-17, h.q.1333/11/1 (1915/9/1), p. 1
- 83 例えば、*Sediqe Doulatābādi* [vol.1, 1377: 16] によると、セディーゲ・ドウラターバーデーは、1917/8年に「エスファハーン女性商会 (*Sherkat-e Khavātīn-e Esfahān*)」を共同経営の形でエスファハーンに設立した。この会社は、ヤズド、ケルマーン、エスファハーン各市に3つの小さな織布工場を経営した。ヤズド工場では絹布、ケルマーン工場では羊毛布、エスファハーン工場では綿布が織られており、これらの工場では合わせて70人の女性が働いていた。
- 84 *Shokūfe*, no.3-18, h.q.1333/11/15 (1915/9/24), p. 2
- 85 *Shokūfe*, no.3-17, h.q.1333/11/1 (1915/9/1), p. 1
- 86 *Khosroupanāh* [1381: 179-180] によると、例えば1922/3年にセディーゲ・ドウラターバーデーは、*Bahārestān*, no.4-5, h.q.1341/5/12 (1922/12/31), pp. 3-4に「今日、我々イラン女性は私たち自身の国家でイラン職人たちの働きにより作り出されたものに満足し、外国の持ちの良くない商品のできる限り回避しなければならない。外国産織物ボイコットは輸入品を禁止することではない。なぜならどの国も輸入品と輸出品を有せざるを得ないからである。金持ちの国では輸出品が輸入品を超過している。つまり多く売って少なく買う、ということである。私たちの国の職人は、自身の布地や工芸品の欠陥を、できる限り取り除こうと努力しなければならない」と記した。